

=====
第4回 みえ若者就労支援ネットワーク会議

日時：2007年10月31日(水) 19:00-21:00

場所：アスト津3F みえ市民活動ボランティアセンター ミーティングルームA・B
=====

グループワークのまとめ

A班：予防

【グループ内でのやり取りで印象に残った点】

「予防」の意味する範囲

- ・職を斡旋することは予防にあたらぬ
- ・予防の対象者は幅広い

対象者が幅広いせいか具体的予防策がまとまらない
予防の対象者を定めて共有する必要性有り

教育との関係

- ・学校教育の制度そのものを変えるべき
- ・学校教育制度を変えることは難しいので、内容が変わるように働きかけるべき
- ・学校以外の場における教育についても考えるべき

教育の重要性はメンバーに共有されているように思われる
切り口を分けて考えるとよりスムーズに議論できるのでは
(制度を変える切り口/教える内容を変える切り口...など)

働く大人と子どもの関係

- ・子どもと大人の間、「働くこと」に対する意識のギャップがある
- ・「働くこと」とはどういうことか、大人は説明できない
- ・「働くこと」を大人が説明する必要はなく、
それよりも、子どもに「働く大人」を実際に見せる or 体験させることによって、
「働くこと」がどういうことなのか子ども自身に考えてもらう

予防のプログラムを考える上で大切なテーマ

議論が抽象的になりすぎ、具体的な方策になかなか結びつかない場合がある

その他

- ・子どもの声が直接聞きたい
:子どもを対象に、働くことの意味を問うワークショップを開催してはどうか

やりたいです！

以上
(文責：福島 有香)

B班：支援ネットワーク拡充

1. 当事者支援者（入口）のネットワーク拡充について
県内各市町で担当者が定められたといっても、実働していなければ意味がない。
そのための体制づくり、ネットワークづくりが重要。
伊賀市内では、障害者自立支援の取り組みを契機に、社協が中心となって、行政や企業も巻き込んで、ネットワークづくりが始まっている。
伊賀市の事例研究がポイント。
引きこもりの若者に、どのようにしてアプローチしたら良いのかわからない。
セミナー参加者へアプローチし、関係を密にしていく。
当事者から「地元では相談しにくい」との気持ちをよく聞く。
色々な地域との連携が重要。
他地域と連携するに当たっては、各地域のネットワークが自地域での事例をきちんと把握しておく必要がある。
2. 部会のテーマについて
「企業の参加」といった出口のネットワーク拡充は、社会全体の意識変化がないと難しく、時間がかかる。
ただし、出口が充実していないと、若者が滞留してしまう。
予算を使わずに、場づくりや意識啓蒙により、ネットワークを拡充していかないといけない。
個人情報保護との関係についても留意する必要がある。
3. 今後の進め方について
次回以降、テーマ・メンバーを次の2つに分け、支援ネットワーク拡充策を検討し直す。
【B1. 行政・地域（入口）のネットワーク拡充】
メンバー：一見、岩脇、河村、北出、生木、堀木
【B2. 企業・社会（出口）のネットワーク拡充】
メンバー：宇佐美、佐々木、曾我部、中川、三好、川北、馬場

以上

(文責：馬場 基記)

C班：当事者サポート

1．議論の方向性について

当事者支援というテーマから、ニート（ひきこもり）と呼ばれている人たちに合った支援ができていくかどうか、支援対象者に合った支援をしていくためにどうしたらいいかを検討していくことになった。その主な理由は以下の3点

- （1）支援者（現段階ではネットワーク会議参加者）が当事者にとって適正な進路の選択をアドバイスできているかどうか疑問を感じている
- （2）当事者と保護者についての現状認識ができていくか疑問である
- （3）世間一般の人たちが持っているニートと呼ばれる人への誤解を解くことにつながるのではないかと考えている

2．現状認識のために

ニート（ひきこもり）のタイプを類型化してみてもどうか。

類型化することで、当事者・支援者・一般で共通認識を形作っていくことにつながるのではないかと。しかし、類型化は優劣を比較するものではなく、差別につながるものではないことをきちんとふまえなければならない。

無業状態に至るまでの当事者の経緯は千差万別であるが、その経緯と現状を把握することで、支援の内容や、支援を行うスタートラインを確認できる。支援対象者のことを理解せずに支援プランを策定しても、効果は期待できない。

3．今回の結論

「当事者・支援者・一般」のそれぞれの対象者別に勉強会を開く。

「勉強会」という名前では敬遠される可能性があり別の名称を使用（勉強会となると意識が高くないと参加できないと思われるなど、言葉に対する心的抵抗感がある）。

また、一方的な話を聞くだけの講演会ではなく、参加型ワークショップも取り入れたい。しかしその場合は、なぜそうした形態の学習の場が必要なのかについて、当事者や一般参加者に説明が必要。

最初は講演会のような形からスタートし、その場に来てくれた人にワークショップ形式の勉強会の参加を呼びかけてはどうか（段階を踏む）

継続的に参加してもらえよう魅力ある内容にしていく工夫が必要である

4．今後の課題

講演会の講師や、アドバイスを受ける医師を誰にするかによって、当事者が今後進む方向が左右されがちであるので、当事者が進む方向選択に与える影響を最小限に止めるよう配慮する。そのために選択の幅を広くし、包括的に支援できるようなネットワークをどう構築していくかが重要である。

また、三重県独自の支援スタイルが出来つつあるので、支援方法の確立まで行かなくとも、方向性だけは明確にしておく必要がある。

(文責：白尾豪紀)